
ムシウタcross

浅井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムシウタcross

【Nコード】

N4440P

【作者名】

浅井

【あらすじ】

「夢」を抱いて生きる少年少女達。 ” 虫 ” によって夢を食われると、超常的な力を得る。夢を食われた者のことを「虫憑き」と呼ぶ。彼らはさまざまな思いを胸に、互いにぶつかり合っていく。少年・浅井は1年前から記憶を失っていた。それはとても重要な記憶だった。ある日、学校の屋上で自分の事を知る少女と出会う。bugと本編の空白の一年の物語

噂？（前書き）

この小説は「ムシウタ」の二次創作作品です
原作のイメージとは違う描写がある可能性があります。
ムシウタ未読の方も良かったらぜひどうぞ

噂？

十年前くらいから噂で囁かれ始めた、”虫”という存在。

政府は完全にこの存在を否定しているがそれは実在した。

“虫”に寄生された者たちは「虫憑き」と呼ばれ、公には存在しないと言われているにも拘らず、もはやその存在を知らない者はいない。”虫”の存在は、噂であることにもかかわらず人々の間で差別と恐怖の対象になっていた。

政府はこの事実を世間から隠すために特別環境保全事務局、通称特環を創設した。

無指定の虫憑きが発見されると彼らに捕獲されるか”虫”を殺されて欠落者になる。

欠落者に感情はなく、命令のままに行動する。いわば抜け殻のような状態だ。

そして、”虫”を生み出す存在が三つ存在する。

まずは分離型を生み出す「大喰い」

彼女は他の三匹に比べ多くの”虫”を生み出している。

大きなサンングラスにコートを着込んだ女性の形をしている

大喰いは生み出した”虫”の能力をコピーして使用することができる。

そして、二番目に多いのが特殊型を生む「浸父」だ。

彼は歪んだ夢ばかりを食す。

特殊型には実体を持たないものが多い。

最後に同化型を生み出す「三匹目」。

三匹目は実体がなく人を器として乗り移る。
同化型は数が少なく、強力な能力を持っている。

放課後。

生徒がちらほらと帰り始めている。

三階の廊下の突き当たりある非常口の扉を開け、その先の階段を上る。窓が少なく薄暗い。階段の先には重々しい扉があった。

普段は生徒立ち入り禁止である屋上。そんな厳しく立ち入りを禁じられている場所こそ、余計に立ち入りたくなるものだ。だがドアノブに手を掛ける少年の右手に一切の躊躇はなかった。人があまり出入りしていないためか、錆びれた金属が擦れる鈍い音が辺りに響く。屋上への扉は、ぎい、と大きな軋み音をたててゆっくりと開いていった。

しかし、そこには先客がいた。

「……？ 誰だ？」

浅井は逆光で見えないその誰かに声をかけた。影は動く。

「…………不思議ですね」

少女が口を開いた。

「……？」

声からすると少女らしい少し高めの声。その少女はこちらを振り向いた。

「まだ救いようはあるんじゃないですか？ この世界は」

少女はこの学校の制服を身に着けていた。背は浅井よりも少し低

いくらい。リボンの色から考えると同級生のようだ。

「あの…何の話をしてるのか分からないんだけど…」。

「とぼけないでくださいよ浅井さん」

少女は口元を歪めて、少年の名前を言った。

「…何で俺の名前」

「同じ学年なのだから当たり前じゃないですか」

浅井は眉をひそめた。

「少なくとも俺はお前のことを知らない」

浅井にとっては、初めてみる顔だった。少女は笑みを消さない。

「そうですね——わたしは高月加奈です」

浅井は頭の中を検索する。だが何一つヒットするキーワードは浮かんではこなかった。

「…聞いたことない。あと何でここにいる。ここは立ち入り禁止だ」

「あなただって立ち入っているじゃないですか」

加奈は、茶色の長い髪を靡かせながらクスクスと笑いながらこつちへ歩いてくる。

それに浅井は恐怖を覚えた。金縛りのような感覚に襲われる。

「…俺以外の人がここにいることは今までになかった」

それでも浅井は声を絞り出すが、しっかりと「質問」まではできない。

浅井の顔には「怪しい」という文字が出てしまっている。

「今日初めて来ました。以外と良い場所ですね、ここ」

加奈は、浅井のすぐ目の前にまでに近寄った。

「浅井さんが来るのを待っていたんですよ」

身構える。普通ならおいしいシチュエーションなのに今は金縛りにあったように動けない。

「…何か用、なのか…？」

すると、加奈は「そうですね」と呟きながら浅井の目を見ながら

尋ねた。

「あなたの夢はなんですか？」

噂？

「あなたの夢はなんですか？」

加奈は問いかけた。

浅井は一瞬固まる。

「……夢……？」

浅井は胸の奥で何かが鳴くを感じた。加奈の瞳が問いかけてくる。

「……なんで急にそんなこと」

「何でもいいです。何か希望のようなものはありますか？」

加奈の真っ直ぐな視線から浅井は目を離し、つぶやくように答えた。

「……俺は……今の居場所を守りたい」

ぼそりとした声だった。自分の何かを振り返りながら語っているような感じだった。

「今の俺には居場所があるからさ……それを守っていききたい——それが希望……夢だ」

加奈は目を逸らさずに浅井を見ていた。一瞬あったあと目をつぶり、微笑した。

「……そうですか、良い夢ですね」。

なぜこんなことを訊くのだろうか。

浅井は、目の前に居る少女・加奈の企んでいることが読めない。

「——浅井さんは、”虫憑き”というものはご存知ですか？」

唐突な質問だった。

最近流行っている”虫”の噂に関する単語だ。”虫”に夢を食べられると虫憑きになり、超常的な力を得るというもの。

「……………あー……………噂でなら聞いたことある」

「そうですか——結構流行っていますよね、その噂」

だろう。

確かに”虫”という言葉を知らない人はいないはず。いわゆる都市伝説というものになっているからだ。

「知らない人はあまりいないと思う……だけど、それも噂止まりって感じた。証拠とかはないし……都市伝説みたいなものかな」

加奈の表情は終始変わらない。左の拳を口に持ってきて「なるほど」と頷いている。どちらかというと相槌のような感じだ。

そして加奈は最後の質問をした。

「では、——あなたは虫憑きなんですか？」

浅井は目を見開いた。

加奈はにやりと笑った。

「あのさ、お前——」

「ありがとうございます。手間を取らせてすみませんでした」
ぎい。

ばたん。

浅井の言葉を切るように、加奈は頭を下げた後、後ろの扉から出ていってしまった。

浅井は呆気にとられぱかんとしていたが、はっ、と気を取り戻すと加奈の出て行った扉を開け、後を追った。

「待てよ！ お前は………！」

浅井が階段を見下ろしたときには、もう加奈の姿はなかった。

「なんだったんだよ……あいつ……」

浅井は眉をひそめた後、そこに立ち尽くした。既に日は落ちて暗い校舎の中には、浅井の呟きが響いた。

噂？

「で、結局そいつの自転車みつからなくてさ、しばらくして交番
いってみたら——って聞いているのかよー浅井ー。」

翌日。

珍しく、朝早くから学校にきた浅井は、昨日の怪しい生徒・高月
加奈を探したものの、姿を見つけることはできず、休み時間のトイ
レから帰りに、塩野栄一・友人15才の笑い話を聞いていたところ
だった。

「ん、聞ってるけど」

正直それどころじゃない浅井は適当に流す。横からは「本当かあ
？」と疑いの声が聞こえる。

「それで続きなんだけど、交番行ったら自転車が見つかったらし
くてさ！ その自転車見てみたらさ、ハ、ハンドルが、ぷぷつ、ハ
ーレーのバイクみたいになってたんだよ、乗って持ち帰るの恥ずか
しかっただろうな」

「んー30点」

「ええっ、なんでだよ、面白いだろっ」

浅井の反応と得点に納得がいかなかったらしい。

「そういうのは現場にいないと笑えないって事じゃないか？ そ
のときの空気ってのもあるし」

「そうかあ？ 僕はその話されたら笑い転げるけどな」

「いやそんなに面白くなかったぞ……単なる盗難事件の話だろ」

「うーむ……話し方が下手なのか……」

納得のいかない顔で塩野は、少し歩みを遅くした。

「それにしても……なんかお前沈んでないか？ 何考え事してん
のよお？ 昨日なんかあったのか？ 朝は来るの早いしさあ」

塩野はジト目で浅井に問いかける。浅井は「んー……」と考えた
後、質問を返す。

「お前、虫憑きっていると思うか？」

塩野は「はあ？」と眉をひそめた。

「あの”虫”の噂のやつか？ そうだな……僕は証拠がないからなんとも言えないよ。そもそも事実かどうか、うやむやだから噂になるんだろうしさ」

「だよな……所詮噂だろ、とか言うこともできないしな。UFOとかよりも信じられるだろ」

“虫”は目撃情報も多く、それにまつわる説なども多く存在する。

「ま、僕はそんなもの本当にいてもいなくてもどっちでもいいね。いたらいたで怖いけど」

テレビなどでも取り上げられるくらいの、少しスケールの大きい噂。この噂は、結構クラスとかでも話題になったりする。

「で、虫憑きがどうしたよ。何か昨日の事と関係あるのか？」

まあそういうこと、と浅井。

「昨日放課後、屋上で時間潰そうとしたら先客がいてさ。そいつが”虫”の関係で質問してきたんだよ————ちなみに女子」

浅井との距離を、塩野はぐんと詰める。女子という単語に反応したらしい。

「おいおい浅井さん、いい年の男女が屋上で二人つきりつてのはどうなんですかあ？ このこの」

何故か小声になった塩野が、浅いの脇を小突く。

「いやそういうの全くなくて。なんというか怪しかったぜ？ 夢とか聞かれたし」

塩野は再び眉をひそめる。

「夢か……噂で聞いた事あるな。確か、夢を聞かれて答えた人は———」

「あ、浅井さんじゃないですか。どもです」

浅井と塩野は同時に後ろを振り返る。

そこには、浅井に夢を聞いた少女の姿があった。

「高月……！」

「え？ なに知り合い？　　というか、えっ？　まさかの？」

浅井は目を見開いた。

「お前……本当にこの学校の生徒だったのか……」

浅井が驚くのを尻目に塩野は「どうも」と挨拶を交わしている。

「浅井さんは他のクラスの人とか本当に知らないんですかね……」

少しショックです」

「他のクラスに興味がいないから……」

浅井が答えると、「この人最低ですね」「浅井はそういうやつだから」と二人が意気投合していた。

「あ、ねえねえ面白い話があるんだけどさ！　この間友人が自転車盗まれて——」

「お前それ他人にも言うのか……」

時計は予鈴の3分前を指していた。

噂？

“虫”の噂には、“特環”という組織が出てくる。

“虫”の存在を世間から隠すために、虫憑きを容赦なく捕獲する政府の組織だ。

虫憑きということがバレると、その組織の者にどこかへ連れてかれるという。

その組織は、“虫”の存在を消すためならどんなことでするらしい。

たとえ一つの島を消すとしても。

あくまで噂。

されど噂。

「きりーっ」

「礼ー」

ルーム長の号令で放課後のホームルームが終わった。

浅井が鞆の用意をしていると塩野が声をかけてきた。

「浅井ー。帰りコンビニ寄ってくけど、どうする？」

肩にぽんと手を置かれた。

浅井は「ああ」と「おお」の中間のような声で反応した。

「いいけど、なんか奢ってくれ」

絶賛金欠中の浅井は、弁当を買う金さえない。

仕方ないという顔で、「三百円までなー」と塩野が言うのを聞きながら、鞆をもって廊下に出た。

「浅井さーん。帰るところですか？ 自分もご一緒していいですかね」

休み時間の時と同じように、背後から声をかけられる。
なんとなく予感はしていたのだが。

「――何か用か？」

浅井は少し睨みながら言葉を放つ。

「いえ別にそういうわけじゃないんですけど……てか酷いですね。
一緒に帰ろうとしただけなのに」

「……お前の行動がなんか怪しいんだよ」

「浅井は冷たいからね、気をつけたほうがいいよ高月さん。僕も
このあと三百円カツアゲされるんだ」

高月がジト目になる。

「カツアゲですか、浅井さんも中々の不良ですね」

「奢ってもらっただけだったの」

塩野を睨む。

「浅井さんはわたしに用があるんじゃないんですか？ 今朝は、
わたしのことを探してたらしいじゃないですか。クラスの人に聞き
ましたよ」

凶星といえば凶星だ。確かに浅井は高月に聞きたいことはあった。
浅井は塩野を一瞥する。塩野は「？」が頭の上についた顔をした。

「……いや、今はいい。考えることが増えるだけだ」

「……そうですか」

そう言ってから高月は微笑した。塩野の頭の上の「？」がさら
に増える。

「それにしてもわたしからは何かカツアゲしないんですか？」

浅井は溜め息混じりに「しないよ……」と漏らしながら、昇降口
を目指した。

コンビニを出たあと方向の違う塩野と別れて、二人は駅の方へ
商店街を歩いていた。

コンビニで塩野に奢ってもらった肉まんを食べながら浅井は尋ね

る。

「——そういや高月、お前どこに住んでるんだ？」

高月は振り返りながら答える。

「このまままっすぐ行った方ですよ、浅井さんは？」

「俺は駅前の交差点右に行った方……」

「そうなんですか、意外と近いですね」

高月はそっけなく答えた。

浅井は再び、肉まんを頬張る。

聞きたいことがあるのに上手く切り出せない。

長い沈黙。

話題が尽きてしまった。

「聞かないんですか、”虫”についてとか」

「……」

浅井は少し動揺した。凶星だった。

「今は塩野さんもないですし、いいでしょう」

「……気づいてたのか」

浅井は一度考えたあと肉まんを袋にしまい、高月に尋ねた。

「……お前は”虫”と何の関係があるんだ」

高月はその質問に、ニヤリと笑う。

「遠回しな言い方ですね。そのまま聞かれても良いんですが」
そのまま。

そのまま聞けば分かる。

「高月……」

歩みを止める。

「お前————虫憑きなんだろう？」

一瞬周りの音が消えた。

高月は微笑する。

「そうですよ」

即答。

「……」

「ありゃ、最初から気づいてたのだと思ってたんですがね」
浅井は沈黙する。

「他の人とかにはまだ黙っておいてください。まだ早すぎます」
「早すぎる……?」

「今騒ぎになったりすると、すぐに特環に捕まりますからね。まだダメです」

「……?」

高月は再び微笑する。

「いずれまた教えます。そのときはぜひ協力してくださいね、浅井さん——いえ、」

「同化型の虫憑き”さなえ”さん」

噂？（後書き）

ちよつと雑になってしまいました。

読みづらいかと思えます。

この回はいずれ修正するかもなのでよしなに。

ちよつとこの先の展開について迷走しております・・・O R Z

噂？

「同化型の虫憑きさん」

一瞬間があつてから浅井が口を開く。

「同化型……？　なんだそれ……。というか俺に言ってるのか？」

「本当に分からないんですか？」

加奈の言葉に浅井は首を傾げる。二人は完全に足を止め、立ち止まって会話をしていた。

「青播磨島という島についてはどうですか、何も感じないのですか」

「青播磨島……？　聞いたことないぞ」

「……特環という言葉は？　“三匹目”は？」

「……全く覚えがない」

「……”先生”は？　花城摩理さんは？」

「……分かん……」

加奈は一度目線を逸らしてから言った。

「………最悪ですね」

その言葉で目を見開く。

浅井の中に怒りがこみ上げる。

「……最悪だと？　なんでそんなこと言われなきゃいけないんだよ！　大体、同化型とか、虫憑きだとか、一体なんなんだよ！　お前、不思議な単語を出すだけで、全然説明しないじゃないか！　そんなやつに協力なんてするわけないだろ！」

商店街のシャッターで声が反響する。

「――そうですね」

浅井の耳に、力のない言葉が届いた。

高月加奈の浅井を見る目つきが強いものになる。

「――ねえ、浅井さん、」

そこで言葉は途切れ、加奈はぐんと浅井との距離を詰める。

浅井の怒りは警戒に変わる。高月は、その胸倉を掴んだ。

視界がゆれる。

「ふざけないでくださいっ！　なんで何も覚えてないんですか！
あんな事忘れられる訳ないじゃないですかっ！　なんで浅井さんは忘れていられるんですか！　なんで思い出してくれないんですか
！」

加奈は力任せに浅井の襟を揺らす。

突然胸倉を掴まれたのと高月の怒声で、浅井は少し怯むがこちら
も引きはしない。

「俺だって記憶を取り戻すことで必死だった！　だけど何も思い
出せないんだよ！　栄一に声をかけられた時の事を本人に聞いても
何一つ手がかりがなかった！　親だって未だに見つからないんだ！
この気持ちがかかるか！」

「……」

加奈はゆっくりと手を離す。

「……あ……その……悪かった」

「ちよつと逆ギレでしたね……はは……すみません」

「……」

沈黙。

「……やっぱり何も覚えてないんですね」

「……高月は俺の過去を知ってるのか」

加奈は俯いて、

「知ってます……けれどわたしからは言えません」

「それなら――」

「すみません……わたしからは虫のことしか……」

「……話してくれないか」

加奈は一度考えてから、

「今日はもう遅いので、詳しいことは明日話します……でもこれ
だけは伝えておきます」

「浅井さんは虫憑きです。おそらく三年ほど前になったのだと思います。たぶん能力はまだ衰えてないはずですが、同時に夢を食べられていると思います。夢を絶やさないように注意してください」
浅井はよく理解ができなかったが頷いておいた。

「分かった。一応気をつける」

「あと、これを渡しておきます。何か手がかりになるはずです」
高月の差し出したそれを浅井は受け取る。

二枚の写真だった。

「これは……」

「……浅井さんがよく知っていた人物ですよ」

一人は白衣を身に着けた青年。

もう一人は白いコートと、ごつごつしたゴーグルを身に着けている少女。

浅井には、微かに見覚えがあった。

噂？

高月と分かれて家に帰った浅井は、インターネットに接続したノートパソコンを起動していた。

『浅井さんは虫憑きです』

高月の言葉がリピートする。

「突然そんなこと言われてもな……」

とりあえず、“虫”について自分なりに調べてみることにした。

高月は話してくれると言っていたが、このままでは気になって仕方がなかったからだ。

検索の枠に『虫』と打ち込んでエンターキー。

すると、予想通りに爬虫類の方の虫についてのページがいくつも上の方に上がってきた。それを無視して、ページを一番下のほうにスクロールする。

検索予備欄を見ると『虫 都市伝説』『虫 噂』というキーワードに目がいく。

(とりあえず、再確認だな……)

『虫 都市伝説』にポイントを合わせてクリック。するとかなりの件数がヒットした。

殆どが掲示板だったので、個人サイトなどを優先して開いていく。特に気になったのは、『オカルト研究 虫について』というページ。クリックしてページを開いてみる。

1. 謎の昆虫”虫”

十年前ほどから騒がれている謎の存在”虫”。どこからともなく寄生され、寄生主の夢や希望を喰らって成長する。だが虫に夢を与えた場合、虫は自らの力を解放し、寄生主に超常の力を与える。尚、虫に夢を食い尽くされると死に至るらしい。虫を殺された場合は、

命は落とさないものの、心を失う。※項目3の欠落者を参照

2. 政府組織について

この国には、虫に寄生された者（以下からは「虫憑き」）を取り締まる組織があるらしい。深夜に大きな自動車や、黒づくめの人の姿を目撃されたという情報も多い。虫憑きを見つけると捕獲、あるいは殲滅を行うらしい。

正直、この程度のことなら既に知っていた。噂で良く聞かし、栄一と話していたこともあったからだ。

今一番知りたいのは、『同化型』とは何か。

（虫憑きには何種類かタイプがあるということでもいいのか……？）

検索枠に『虫憑き 同化型』と打ち込んでエンターキー。

結果はあまりピンとするものが出なかった。

やはり政府の組織（？）が隠しているのか、簡単には特定させてはくれない。

残すは口コミサイトと掲示板のみ。

浅井は、掲示板の方を調べてみることにした。スレタイトルがずらりと並んでいて、新規書き込みがされると、上のほうに上がるというタイプのものらしい。

（ごちゃごちゃしてて分かりづらいな……）

『【虫】虫憑きスレ総合5【都市伝説】』

一番分かりやすいタイトルのスレを開いて調べる。

流れとしては、”虫”についての目撃情報などを上げて、それについて考察する感じ。

しかし『同化型』についての情報は何も得られない。

「もう少し調べたらシャワー浴びて寝よ……」
ふと時計を見ると日にちが変わっている。スレを一通り見ているので当然だった。

浴室へ向かう前に、掲示板の中で見かけた『青播摩島』というキーワードを検索枠に打ち込む。

（確か……高月もそんな名前を言っていた……）
このキーワードで検索をかけてみる。
（……？）

『0件』

青播摩島という島がこの国から消滅していた。

噂？（後書き）

久しぶりの更新。

だいたいこんな方向でいきますので・・・っ

地獄？

空が光った。そして凄まじい爆音と共に地響きが鳴る。

「……！」

一軒家の歪んだ窓から、少年は必死に身を乗り出そうとする。

「う……があっ」

少年の身体は、窓枠からずりりと地面に落下し、そのまま一回転した。

そして向こうのほうから、もう一度の爆音。

容赦の無い空襲だった。

「ゴホッ、ゴホッ、ぐ……っ」

熱い。

熱い。

熱い。

熱い。

煙を見事に吸い込んでしまった。

熱い。

熱い。

呼吸ができない。

目がかすむ。

ぼやける。

黒い棒切れが、遙か遠くからこちらへ向かってくる。

ぐんぐんと近づいてくる。

棒切れ？

いやそれにしては太すぎる。

ああ。

なるほど。

ミサイルだ。

次の瞬間、一瞬だけ地面上の空気が止まった。

間近で再び凄まじい爆音と共に、とてつもない光が視界を覆う。

そして、背後にあった一軒家は木っ端微塵に吹っ飛んだ。

木の破片が、炎を上げて舞う。

あたりが火炎に包まれる。

「う……」

少年の呻き声。

しかし少年の身体は碧い光に覆われ、深い傷などは全く見つからなかった。

その身体は、誰かに抱きかかえられる。

——うおおおっ！

少年を抱きかかえた、その誰かの声が辺りに響く。

彼の「同化」能力で、少年は一命を取りとめた。

彼は少年を抱きかかえたまま走る。

爆音が鳴り響く。

火の海を一直線に渡りきってたどり着いたのは、粉々になった診療所の跡地。

そこで「同化」能力を使った彼の身体は、少年と共に地面に沈んでいき、そのままドンツと地下の貯蔵庫に降り立つ。

少年は、そのまま貯蔵庫の床に寝かされた。

能力を使って、彼はまた地獄へ姿を消した。

三十分ほどしてから、彼は少年の元へ戻ってきた。その腕の中には泣き声を放っている赤ん坊があった。その赤ん坊を、そっと少年の横へ寝かせる。

——生きてくれ……どうか君たちだけでも……

祈るような声で語りかけたあと、彼は地上へと姿を消していった。

地獄？（後書き）

ちよつと書いておかないと後味悪いので、投稿しておきます。

文章力がないので、どのシーンか分からない方は、ムシウタbug
7巻の296pを参照していただければ良いと思います。

噂？

ひどい夢をみた。

辺りが火の海で逃げ回るような、そんな夢だったのだが浅井には、ぼんやりとしか記憶に残っていない。

外からは小鳥の声も聞こえてきて、とても爽やかな一日を連想させる朝だった。

そんな中、浅井は汗をびっしょりかいている。昨日、しっかり髪を乾かさずに寝た所為か、ぼさぼさに寝癖がついていた。

「……………あ」

時刻は八時十分。ここから高校まで三十分。非常にまずい。浅井は一週間前に、担任の川口・三十二歳独身にこっぴどく叱られたばかりだった。

「おいおい参ったな……朝飯抜きだなこれ」

普段の浅井なら、そのまま二度寝して夢の世界へ旅立つのだが、今日は、叱られる事の他にも気になることがあったので学校に遅れることは良策ではなかった。

むくりとベッドから起き上がって、せっせと制服に着替えて登校の準備をし始める。こういう時だけ、制服のある学校で助かると思った。

時間に余裕が無かったのだが、それでも水分補給をしたかったので浅井は台所の冷蔵庫へ向かう。

そこで邪魔が入った。

玄関のインターホンが、よく耳にする一般的なベルのメロディを二回ほど響かせた。

『おはようございますー。あれ？ 浅井さんの家ですよねここ？ あの一起きてますかー？』

ダルそうな少女の声がインターホンから聞こえてくる。その声で正体に気づいた浅井は、それを無視して冷蔵庫を開け、牛乳パックを取り出す。

『あのー、遅刻しちゃうんですけど……』

さらに玄関のベルが押される。

浅井はゴクッと牛乳を飲み干すと、牛乳パックをしまい、鞆を持って玄関へと向かう。

『あの、浅井さん、マジで時間やばいです』

玄関のベルが連打され始める。声とベル、それぞれから表れる感情が全く合っていない。

浅井は急いで靴を履き、家の鍵を持って玄関の扉を開けた。その瞬間一気にも外の光が中へと入る。

そこには、眉を顰めてベルを連打している高月の姿があった。高月も制服を身に着けている。

「あーもう、そんな押すと壊れるからやめろ！」

浅井の姿に気づいた高月が、ベルを押す手を止める。そしてその目が少し輝いたようにも見えたが、すぐにじっとした目になり、

「浅井さん……出てくるの遅いです。起きてたのに無視しましたね？ 分かるんですよわたしには」

「いや、ベルは一回でいいからな。あとなんでお前、俺の家知ってるんだ」

「大体の場所は昨日教えてもらいましたし、浅井さんの家がここにあるという噂もありましたしね」

「噂？ ああ、誰かクラスの奴から聞き出したのか——それにしても、何の用だ？」

制服で、この朝早い時間から家に来るとなると、大体の予想はつくが、浅井はあえて尋ねる。

「一緒に学校行きましょう——と言いたところなんです、別件です」

「？ どういうことだ」

そもそも、一緒に登校する理由が浅井には分からなかった。昨日、「詳しいことは明日話す」という高月の言葉を除いて。

「ちよつと着いてきてもらいたいんですが、良いですか？」

浅井にとつてありえないことを述べた高月。

「いや待て待て、今日は遅刻するとまずい。川口に叱られる」

「それより、こちらの方が重要です」

少し強めの口調で、高月が浅井の言葉を遮る。

「いや……トイレ掃除二週間はきつい」

遅刻や校則を違反すると、川口教師の場合だけトイレ掃除の罰則を与えられる。トイレ掃除をしている人に謝りたい。

「……」虫” についての用件なんです」

“虫”という単語を聞いて、浅井は真剣な表情を浮かべる。

“虫”……？ なにかあったのか？」

「ちよつと会わせたい人がいるんです……お願いします」

「今すぐじゃないと駄目なのか？」

高月が右手に着けている腕時計を確認する。

「できれば早急に。間に合いませんから」

「……はあ……、分かったよ」

どうやらトイレ掃除は決定だな、と浅井。

小さく溜息をつく、と、玄関の中に鞆を放り投げた。そして、高月の方へ向き直ってから面倒くさそうな顔で言う。

「朝飯奢ってくれよな」

それは了解の意味だった。一瞬きよとした高月はクスッと笑みを溢して、

「はい、約束しますよ」

そう言って玄関を背に歩き出した。

噂？（後書き）

久しぶりの更新です。

前の話忘れかけてました。

浅井の口調が少し変わってしまったかもです

噂？（前書き）

とりあえず、むしばね接触前まできました。

噂？

浅井は、高月の横に立って歩いている。方角的に旧小学校（今は誰にも使われていない）に向かっているようだった。その小学校は、二年前程に津波で腐食してしまったらしい。

浅井の住んでいる街は海が近く、ものの5分程でそれを眺めることができる。海水浴をするような砂浜は少なく、主に漁港が多い。少し塩味を含んだ潮風の匂いが、浅井の鼻を掠める。

「高月」

浅井は唐突に話しかける。高月はその一言に一瞬石になるも、ゆっくりと横にいる浅井に顔を向ける。

「昨日のことなんだが、詳しい話ってやつを話してくれないか？」
何かを思い出したかのような顔をした高月は、少し考えた後、

「えーと、これからの用事を済ましてからの方が話しやすいんですが……」

「そうなのか？ いや、それでも自分の事だけは把握しときたいんだ」

「自分の事ですか？」

ああ、と頷いて、浅井は昨日自分で調べた結果の事を話す。そして、最も疑問点だったことを尋ねる。

「同化型ですか……」

歩きながら、少し俯いて考える高月。少し唸ってから、

「……虫憑きというのはどうやってなるのかは知っていますよね？」

浅井は頷く。噂でされている話に、虫憑きになるきっかけの事もあった。

「夢を喰われてなる……であってるよな？」

「それで合ってます……ですが、その虫を生み出す原虫についてはご存知ですか？」

「原虫……？」

原虫、というキーワードは、昨日全く見かけなかった。

知らない、という浅井の表情を読み取った高月は話を続ける。

「虫を生み出す存在、原虫は三匹いるんです。それぞれ違った性質を持っていて、その中の一匹『大食い』は最も多くの虫を生み出しています」

「大食い……」

新しい単語がどんどんと、浅井の頭の中へと流れていく。

「この原虫の違いによって、虫憑きのタイプは変わります。大食いの場合は『分離型』ですね。言葉の通り、虫と虫憑きの人間が分離して存在します」

なるほど、と浅井は思った。あながち、虫憑きには複数のタイプがある、という自分の考えは間違っていなかった。

「それで……『同化型』っていうのは？ 俺がその同化型なんだろう？」

一番の本题を切り出す。多く量産されているらしい、『分離型』とはどこが違うのだろうか。言葉の通り、虫と同化する、ということだろうか。

「想像している通りですよ。虫と同化する虫憑きです。原虫は『三匹目』と呼ばれています。本当の名前は——『アリア』」

真剣な眼差しで浅井に告げる。最後に少し間を空けた理由は浅井には分からなかったが、突如浅井の頭に電撃が走る。

「アリア……？ アリア………アリア・ヴァレイ……」

うわ言のように言葉を漏らす浅井を見て、高月は目を見開く。

「浅井さん……？ 知っているんですか……？」

ほんの少し希望を含んだ声で高月が尋ねる。我を取り戻した浅井は、高月の迫る表情をみて引きながらも、

「いや……知らない。なんか頭ん中入ってきただけだ」

突然『三匹目』の名前を呟いた浅井の様子に戸惑いながら、高月は歩を進める。

「そうですか……少し驚きました」

そう言って高月は、安堵の息を吐く。それが溜息のようにも見えた。

浅井はそれには気づかず、本題の続きを尋ねる。

「それで……同化型ってのはどういうものなんだ？　というか今の俺には虫が同化してるのか？」

高月は、首を横に振る。

「いえ、今の浅井さんには同化していません。眠っている、という状況に近いです。そして、同化型の虫憑きは今までに4人までしか確認されていないそうです」

「俺を入れて5人……少ないな」

浅井は、自分自身が何か特別な存在のように思えた。多くの虫憑きが存在するらしい、この世の中で5人しかいない『同化型』の一人と告げられたからだ。

「それ故に、強力な力を持っているんです。それはとてつもない力なんです。浅井さんの虫も目覚めるのか分からないので、注意してくださいね」

高月は、別の同化型虫憑きに接触したことがあるのだろうか。まるでその同化型の力を見たことのあるような言い方だった。

疑問に思うことはあったが、高月の心配するような目を見て、浅井は頷く。

「ああ、わかってるよ」

自分の身は自分で守らなければならない。そんな事を思いながら浅井は返答する。

話しながら歩いていた二人は旧小学校前に来ていた。やはりここが目的地だった。

「今から、ちょっと協力者に会います。浅井さんは私の後ろで話を聞いているだけで結構ですから」

聞いているだけ、というのには少し心配になったが、浅井はそれを受けて入れる。

「え？ ああ……一応了解した」

「では行きますよ」

その言葉と共に、浅井と高月の二人は旧小学校へと足を踏み入れた。

噂？（後書き）

この後のストーリーは考え中です。
公募用と平行してプロット起こしています

噂？

旧小学校はいかにも廃墟のような風貌をしており、夜になれば肝試しができそうな場所だった。こんな建物を放っておくこの街の役場の人も、一体何をしているんだと浅井は思った。

「おいおい……不法侵入だなこれ」

浅井と高月は、旧小学校の昇降口から堂々と校内へ入る。校内の床は緑で、壁を叩くとほこりが舞いそうな古い校舎だった。

「津波の被害の時の物か分かりませんが、木が腐っている部分もあるっぽいので気をつけてください」

浅井はこくりと頷く。

校舎の壁を良く見ると、下の辺りから色が変わっていた。恐らくそこまで海水に浸かったのだろう。

二人は突き当たりの階段から二階へ上がる。二階は長い廊下があり、一定間隔に教室が配置されていた。いわゆる教室棟だ。

「しかし……一体誰が居るっていうんだ？　こんな廃墟に。協力者とか言ってたがどういう意味だ？」

薄暗い廊下を歩きながら浅井は尋ねる。大分校舎の深いところまできたらしい。

「わたし達と同じ虫憑きですよ。複数人居ると思われれます」

「複数人？」

「はい。彼らは”むしろね”と名乗って行動しています。まあ、レジスタンスの一種ですね」

浅井は眉をひそめる。そんな団体が存在する事は、ネットのどこにも載っていないかった。

「レジスタンスってことは、何かに……おいおい、まさか政府の組織のなんとやられてやつに抵抗している団体か……？」

“虫”の噂でよく持ち上がる話題で、そんな存在が囁かれていた。確か、虫憑きを捕獲したりする黒ずくめの集団とかどうか。

「そうです。特別環境保全事務局、通称”特環”に対しての抵抗運動をしている勢力と考えて良いです」

「その特環のやってる事ってのは噂でしか聞いたことないんだが……」

浅井は詳しい内容を聞き出したかった。しかし、高月は少し考えてから視線を先の方へ向けて、

「まあ、詳しいことは”むしばね”の方から聞いてください。多分、その噂通りの話だと思いますがね」

そう言って高月が立ち止まる。何かの教室の前だった。浅井はその教室扉の上にあるプレートを見上げる。

「図工室……？」

高校でいう美術室がそこにあった。普通の教室とは違う雰囲気があり、外には機材が置いてある。

「人の気配がしますね……さて、入りますよ浅井さん？」

何故か小さめの声で話しかけてくる高月。浅井は了解、と首で伝える。

高月は迷いなくその扉をガラツと開けた。中に居る人たちが驚く様子が伝わってくる。

「こんにちは」

親しい友達にかけるような調子で挨拶をする高月。浅井は、中へと入っていく高月の後を追う。

「”むしばね”のアジトはここですか。中々陰気臭いところですね」

そんな事をさらっと述べる高月。浅井は少し居心地が悪くなった。教室の中には五人ほど居た。二人の少女と三人の少年で、二人の男女以外は図工室特有の木の椅子に座っていた。

「アンタは……この間の……」

立っていた二人のうちの少女が口を開く。まるで高月の登場に驚いているようだ。

その少女は赤いショートカットの髪で、どこかの学校の制服を着

ており、浅井達より年下に見えた。

「高月加奈、ていいます、この前はどうもでした。今日はちょっと知り合いを連れてきたんですよ」

「知り合い？」

少女が首を傾げると、高月が立ち位置を横にずらした。全員の視線が浅井に集まる。

「……あ？ あ、ああ俺か。えーとその、よろしく？」

いきなり話を振られた浅井は戸惑ってしまう。高月は呆れた顔をして、他の人達は静まり返っていた。

「その人、虫憑きなの？」

少女が怪訝な顔で尋ねる。その問いに高月が答える。

「そうです。『分離型』の虫憑きですよ」

浅井は驚く。

高月が嘘をついた。

理由は分からないが、浅井が『同化型』の虫憑きということを、高月は口外したくないらしい。

そんなことも知らずに、その少女は納得した顔で、

「そう…あたしは立花利奈、あと丁寧語はやめて欲しいな」
自分の名を名乗った。

「”むしろね”へようこそ」

噂？（後書き）

仕方なく原作のキャラを出しました。
少しムシウタっぽいところ出そうかなと。

口調心配ですが頑張ります

噂？

「それで……アンタ達の用件は何？」

少し真剣な顔になった利奈が尋ねる。元々、何も知らずにこの場へ来ている浅井は返答のしようが無い。

「情報交換が目的です」

高月が口を開く。はっきりと自分の意思を伝えたようだ。

「交換ね……むしばねに協力してくれる、とかだったら歓迎なんだケドな……」

あと丁寧語はやめてよ、と利奈。

癖だから仕方ありません、と高月。

「うーん、別にあなた達を邪魔したりする事はないですから心配なく」

「何か考えてそうね……まあいいわ。情報ってのは何？」

「特環についてですよ」

“むしばね”の全員がピクツと反応する。

「特環の今の潜伏情報などを入手しました。それをお渡ししようと言っているんです」

「アンタ……特環のスパイか何かじゃないわよね……？ どこでそんな情報を？」

怪しむような態度に、高月は飄々として、

「噂ですよ噂。でも情報を確かですよ。どうします？」

「……いいわ。あたし達にとっては好条件だしね。そちらの欲しい情報によるけど」

「あ、はい。えつとですね……一年前にあった流星群の夜の出来事について知りたいんです。ついでに、ここに立っている浅井さんに、虫憑きについて教えてあげてくれませんかね？」

高月はチラッと浅井の顔を見てからそう言った。

「流星群の夜……赤牧市での事？ あの戦いにはあたしは参加で

きなかったから詳しいことは話せないケドいいの？」

流星群の夜というのは、かつて一部の虫憑きが、集団で始まりの三匹の一匹”大食い”に戦いを挑んだ夜の出来事だ。その結果は、虫憑き側の無残な敗北だった。

「構いません。知っていることだけで十分です」

「ふうん……あと、その浅井っていう人は虫憑きなのよね？」

それなら最低限の事は知ってるハズじゃない？」

いいえ、高月は首を振る。

「浅井さんは記憶が欠如しているんです。だから夢も忘れていて、虫”が眠っている状態にあるんですよ。ですから自分の意識で虫を出したりできないわけで……」

「……そう……。いや待って。眠っているといっても”虫”が消えたワケじゃないし、意識すれば現れると思うわよ？」

利奈の言葉に首を傾げる高月。

「そうなんですか……？ 浅井さん、ちょっと試してもらっていいですか？」

「試すって……どうやってだよ」

“虫”を出すなんて事は一度もやったことがなかった浅井は、その手順が全く分からなかった。

「普通に出ろー、て念じればオーケーよ」

横から利奈がアドバイス。

「やけに簡単だな……こうか？」

すると、不意に浅井の肩の辺りに”虫”が現れた。緑に近いトンボのような”虫”。形状からしてサナエトンボに似ていた。その”虫”はどことなく元気がない様子だった。

浅井はごくりと唾を飲んで、

「これが……俺の”虫”……？」

身近で見るとかなり大きいサイズだった。自分の中からこん

なモノが出てくるとは、と浅井は目を疑った。

「確かに弱っているように見えるわね……」

利奈が、目の前の”虫”を見ながらそう呟く。

一瞬あった後、その”虫”はふわっと浮遊し、浅井の頭上から再び中へ入っていった。”虫”の姿が消えたのだ。

「戻った……」

浅井は少し安堵する。心の中で、もし暴れたりしたらどうしようと思っていたところだった。

「言った通りでしょ？」

利奈が少し得意げに言う。確かに”虫”は完全には眠っていないかった。しかし、普通の状態では無かった事は確かだ。

「……おい高月、今の見たか？ 今のが俺の”虫”らしい」

そう言って浅井は高月の方を振り返る。

すると、目を見開いている高月の姿が目に入った。

「……同じ”虫”……」

何か呟いているが、よく聞き取れなかった。

「高月？ どうした？」

「……あ、いえ、少し驚いただけです。浅井さんも虫憑きだという事が再確認できましたね」

「ああ…自分の虫くらいは確認しときたかったし丁度良かった。」

「えっと、加奈……だったけ？ 情報交換に応じるわ。ちよっとこっちに来て」

そう言って利奈は奥のテーブルへ移動する。高月もそのテーブルへと歩いていく。

「あなたはこっちに来てください」

突然浅井の腕が捕まれる。利奈の横に立っていたもう一人の少年だった。

「オレは日々野 一房ていいいます。一応オレより年上ですよね？」

そう言って浅井を入り口近くのテーブルへ案内する。

他のむしばねメンバーが椅子を用意してくれた。

「そうらしいな……お前が説明してくれるのか？」

浅井はテーブルの近くまできて少年に尋ねた。一房と名乗る少年は、テーブルの向こう側の椅子に座った。

「はい。まあオレたちも”虫”の謎とかは分かりませんが、一応今の状況とかなら説明できますよ」

話し方や表情から、浅井はこの少年が良い人間に思えた。

それを踏まえて浅井は、

「ああ、頼むよ」

そう呟いてから木の椅子に腰掛けた。

噂？（後書き）

利奈の口調難しいですね。

日々野 一房の口調も、原作ではあまり登場しなかったので不安です（特に敬語）

少しペース落とします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4440p/>

ムシウタcross

2011年11月12日14時31分発行